

# 山形・山田遺跡

- 1 所在地 山形県鶴岡市大字山田字油田ほか
- 2 調査期間 一九九七年度調査 一九九七年(平9)四月～一月

- 3 発掘機関 鶴岡市教育委員会

- 4 調査担当者 眞壁 建・松田亜紀子

- 5 遺跡の種類 集落跡・河道跡

- 6 遺跡の年代 古墳時代中期～後期、平安時代(九世紀～一〇世紀)、中世(一五世紀)、近世末～現代

- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(鶴岡)

山田遺跡は鶴岡市の西部、JR羽前大山駅の南側の、標高一三・五mの微高地上に立地する。現況は水田・畑地である。遺跡の周辺は、北東に向かって流れる大山川に合流すべく北流する湯尻川などの小河川に囲まれた低湿地帯である。遺跡か

ら西へ約5kmほどで日本海に出られるが、加茂丘陵の山塊が途中に存在するため、河川は大山付近から北に向かい、庄内砂丘に沿いながら日本海に注ぎ込む。遺跡全体の面積は、約二万㎡である。遺跡の発見は昭和三〇年代の暗渠排水工事の際の土師器出土に遡り、以来古墳時代後期の集落跡として知られてきている。一九八八年に県教育委員会によって県営圃場整備事業に伴う調査が一部実施されており、九世紀前半の遺構・遺物が検出されている。

今回遺跡内における工業団地造成計画が具体化するにあたり、鶴岡市教育委員会では記録保存を目的とした緊急発掘調査を一九九六年から実施している。A調査区からM調査区までの面積は約三五〇〇㎡である。古墳時代中期後半～後期までの集落跡を中心として、平安時代前半～後半の集落跡、中世の溝跡などが検出されており、それらは時代によって分布がやや異なることも判明してきた。

今回紹介する二点の木簡は、一九九七年度調査区であるJ区(古墳時代～平安時代の河川跡から出土したものである。この河川跡は平安期には検出面で幅二〇m、深さ一m前後を測る。最上層に十和田aと考えられる火山灰層が認められ、一〇世紀の前半代には埋没していることが判明している。二点の木簡は、出土した地点は異なるが、層位はいずれも中層～下層上面で、出土土器から九世紀前半の遺物と考えられる。なお、河川跡から東へ六m離れた地点には二間×三間と一間×一間のセツトをなす掘立柱建物が二時期分重複し

て確認されている。

河川跡からは、木簡の他に「安」「守」「刑」「田領」「<sup>〔領カ〕</sup>」「大伴」「成継」「三」「伊」「〇」などの墨書土器や、皿・盤・曲物・箸状木製品・斎串・弓・梯子などの木製品が出土している。

# 8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「甘祢郷錦織部果安戸主佰姓<sup>〔巫部カ〕</sup>長<sup>〔領カ〕</sup>召<sup>〔山カ〕</sup>守<sup>〔領カ〕</sup>大<sup>〔山カ〕</sup>」

495×46×15 011

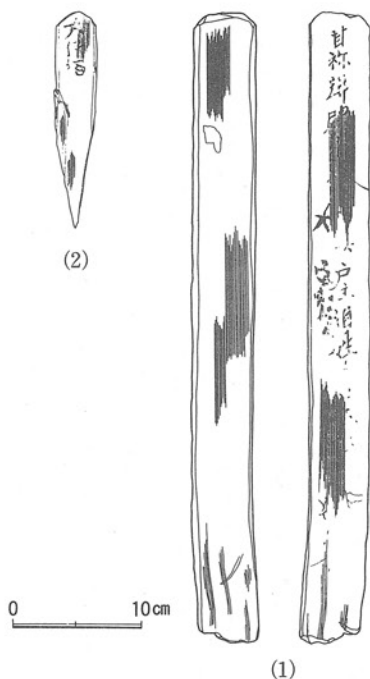
- (2) 「大伴酒<sup>〔山カ〕</sup>」  
172×33×5 051

(1)は、下端部に若干の欠損箇所が認められるが、ほぼ原形を留めているものと考えられる。文字は二行あり、左行上部の「大<sup>〔山カ〕</sup>」は異筆と考えられる。下半部は墨痕が薄くなり判読できない文字が多い。裏面にも墨痕が認められるが判読できない。文脈から召喚木

簡と考えられる。甘祢郷は、『和名類聚抄』の出羽国田川郡の郷名にみえる。東急本は「甘祢」、高山寺本は「其祢」に作り、文字に異同があったが、この木簡の出土によって、東急本に従うべきことが明らかになった。

(2)は、下端を尖らせた付札状の木簡である。下半部は墨痕が薄くなり判読不能である。

(真壁 建・松田亜紀子)



(1)表